

パブリックエネミーを一人飼っている。

祝詞際本文は十五の誕生日を前にして死ぬ。というのは『アカシックレコード写本』に共通する書き出しである。ありとあらゆる言語で書かれたその書物はあらゆる古書店に存在し、その増殖と翻訳の果てに古書店群を一つの組織へと押し上げた。

世界規模家の一人娘、友達は十三歳の夏、バカンス先の香港で訪れた古書店にずらりと並ぶ『アカシックレコード写本』を前に初めてそれを知る事となった。

祝詞際本文が初めて手紙をポストに投函した日、彼女の実家は全焼した。

祝詞際本文が宛てた恋文は相手を心停止へと追いやった。

祝詞際本文の提出した作文により国語の担当教諭が三人死んだ。

世界規模友達は祝詞際本文の友人である。

「ねえ」

世界規模グループはありとあらゆる技術力を蒐集し、その圧倒的な規模の高層ビル百五十二階ワンフロア丸ごとを祝詞際本文に捧げた。

「これ、そろそろ外してくれないかな」

「慌てないで。貴女の自由は求めるほど遠のいていくわ」

「哲学的だね。きみは銅像か何かなのかい」

「じゃらり、えらく重たげな金属音。」

「貴女の目は飾り？ まあ蠟人形にならなあってあげてもいいわよ」

「三島か。きみは嫌いだと思っていたけど」

「美輪さま、わりと好きなの」